特集

# 日本の伝統文化を支える「漆」

## ～国産漆 100%を目指して～

成長を阻害しない適正な立木密度で管理されているウルシ林

特集

# 日本の伝統文化を支える「漆」

## ～国産漆100%を目指して～

**漆は日本の伝統文化にとって切っても切り離せない資材です。その価値は漆器製品にとどまらず、国宝・重要文化財の修復にも必要不可欠な存在となっています。**

**今回は、国産漆の重要性が高まっている今、抱えている課題と解決に向けた取組をご紹介します。**

※樹木は「ウルシ」、樹木から採取された樹液は「漆」と表記

### 日本の伝統文化に欠かせない天然塗料「漆」

ウルシとはウルシ科ウルシ属の落葉高木で、世界の亜熱帯から暖温帯を中心に約250種が知られており、日本ではウルシ属の仲間としてウルシのほかに、ヤマウルシ、ヤマハゼ、ハゼノキ、ツタウルシの5種が存在しています。ウルシは縄文時代早期からすでに存在しており、漆は塗料や接着剤、果実は蝋、軽くて耐湿・耐水性に優れている材は漁具の浮きとして用いられるなど、漆から材まで余すところなく利用されてきました。現在では接着剤や漆器以外にも、合成樹脂塗料より優れた質感を持つ国産漆が国宝や重要文化財の修復に使われ、日本の伝統文化に欠かせない存在となっています。また、有機溶媒を含まない塗料として、環境保護やエネルギー利用の観点からも重要な天然塗料といえるでしょう。

### 国産漆の現状と課題

日本において、ウルシは北海道から高知県まで広く植栽されています。漆生産量第一位は、国内生産量の7割を

占めている岩手県で、次に茨城県、栃木県と続きます。しかし現状では、日本で使用される漆の約98%を中国産が占め、国産漆は残り2%程度しか生産されていません。今、こうした日本の伝統文化を支える国産漆の危機的状況が大きな課題となっています。

## 課題① 伝統文化を支える国産漆の供給危機

昨今、存在感を増すプラスチック製品や生活スタイルの変化により、漆器を使うことが少なくなりました。これに伴い、漆の消費量と輸入量が20年前に比べ、大幅に減少しています（図1）。一方で、その特性は十分に解明されていないものの、中国産漆よりも国産漆の方が耐久性に優れているといわれており、高級漆器をはじめ、国宝・重要文化財の建造物の修復に使用されています。平成19年度からは日光の重要文化財修復にも大量の漆が使用され、国産漆の安定的な供給体制を確立する必要性が高まっています。こうした国宝・重要文化財は、本来の手法で修理することが文化の継承に繋がるとともに、漆は日本文化において象徴的な資材などであることから、文化庁が保存修理事業で使用する漆の100%国産化を発表しました。そのためには、今後年平均約2・2トンが必要であることから、現在の国内生産量約1・2トンを倍増することが求められています。

## 課題② 漆掻き職人の減少

現在、漆掻き職人の減少と高齢化問題に直面しています。ウルシ林造成には、果実から果皮、ロウ成分を除去してから播種する実生苗を育てる方法や、母樹の根を掘って分根を採取し、分根苗を育てる方法、そして切り株からの萌芽木から育てる方法があります。その後、保育管理を経て通常15～20年で漆の採取が可能になりますが、採取期間は6月から10月の5ヵ月間のみのため冬の収入はありません。こうした収入を得られる時期が限定されていることが、若い人の就労を遠ざけている原因の一つとして挙げられます。

ウルシ果実

採取した分根

種子

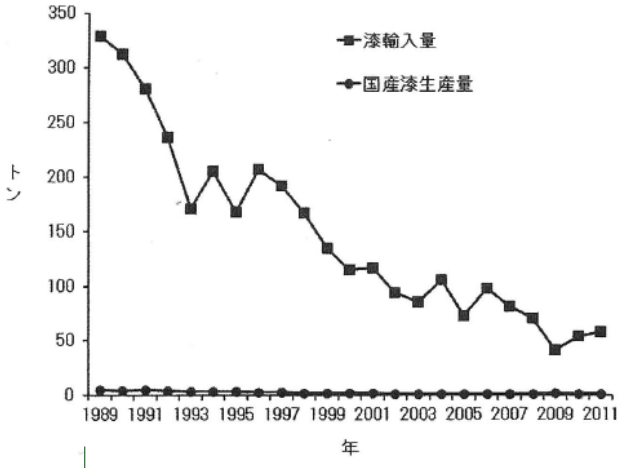

図1　漆輸入量と国産漆生産量

萎凋したウルシの葉

ツキノワグマによって剥皮された被害

浄法寺町で育成しているウルシの苗

漆を採る職人

## ウルシから漆が採れるまで

❶ 鉋で幹に一筋の線を入れる

❷ しばらくすると徐々に漆がにじみ出てくる

❸ 出てきた漆を先端の尖った箆で掻き採る

❹ こうして採取されたウルシ。採取シーズン中は一人あたり一日約100本から採取する

漆を取る方法は、まずウルシの幹表面を鎌で削り、樹液の通り道を一部遮断するように鉋（かんな）を用いて平行に溝状の傷をつけます。その後、溝ににじみ出てきた漆を専用の箆（へら）をスライドさせることで掻き取ります。採取する時期は6～10月の5ヵ月間で、ウルシ1本あたりから採取できる漆の量は概ね200g（牛乳瓶1本分）ほど。ウルシは1年で掻き終え、その後伐採されるため、「殺し掻き」と言われています。

## 漆国内生産量の7割を占める浄法寺。生産量確保に向けた取組

二戸市浄法寺町では、低迷した漆産業の復活や国宝・重要文化財保護による国産漆の需要増などの課題を解決すべく、生産量の安定化に向けた主要政策として良質なウルシ資源の確保に着手。ウルシの苗木購入費の一部助成やウルシ林の保全活動に取組んでいます。また管理環境の整った耕作放棄地へのウルシの植栽奨励などの他、植栽計画をはじめとした今後の施策に向けてウルシ植栽地の資源調査を行いデータベース化することにより、資源管理に向けた仕組み作りの構築を目指しています。その他、国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所と共同して、通常より漆が多く取れるウルシ系統の選抜や苗木の大量生産などの研究も進めるなど、国産漆の増産に向けた取組を進めています。

## 技術伝承を通して日本の伝統文化を守る「うるしびと」の育成

1950年代には約2，000人いた漆掻き職人ですが、2014年時点

## 浄法寺漆の漆器に「滴生舎」

漆器を販売するお店がある浄法寺町。その中の一つに「滴生舎」があります。ここは漆を次世代へつなぐべく、二戸地域で採集された浄法寺漆を使った製品を展示販売し、その魅力を発信するためにつくられました。

滴生舎内の様子

隣接された漆器工房

浄法寺産の漆器を加工・販売する滴生舎

## 「国産漆増産に向けての課題と未来について」

国立研究開発法人森林研究・整備機構
森林総合研究所東北支所
産学官民連携推進調整監
田端　雅進

10年ほど前からウルシに関わる研究してきた中で、国産漆増産に向けての課題が見えてきました。その中でも喫緊の課題として挙げられるのが、ウルシ資源の確保と漆掻き職人の高齢化及び後継者不足です。

ウルシ1本から採れる漆の量は牛乳瓶1本の約２００ｇです。国産漆増産のため、今後、漆の生産量が２～３倍多いウルシを選抜・育成するための研究や、量産ウルシを植栽・管理していく取組などが求められています。

加えてプラスチック製の安価な代替品が数多く流通していることも漆器の需要減につながり、その結果漆が使われなくなっています。そのため、まずウルシの植栽木から漆の採取及び精製やその漆を使った漆器製作までの工程を消費者に伝え、漆器を使ってもらうことが大切ではないかと考えています。そうすることで漆器の良さや価値など漆器への理解に繋がり、その結果漆器を使う方が増え漆の生産量向上に繋がっていくのではないでしょうか。

加えて漆の増産に対応できるよう、漆掻き職人の確保やその技術の伝承などの「人づくり」も同時並行で進めていかねばなりません。

これらは一朝一夕でできることではありませんが、そうした地道な取組を続けていくことが、ウルシの資源造成や地域再生にもつながっていくものと考えています。国産漆の増産を目的とした研究をはじめ、漆器以外での漆の用途拡大など、川上から川下までの一連の中で総合的に取組まなければならないと考えています。現在その目標に向けてそれらを一歩一歩進めていき、次の世代へバトンタッチすることが私の役目ではないかと感じています。

### 田端　雅進氏プロフィール

国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所東北支所で産学官民連携推進調整監を務める。専門は樹病学・森林保護学。漆の研究・普及活動に取組んでおり、漆サミットやシンポジウム、ワークショップなどを主催する他、HPなどによる情報発信を行っている。

## 漆の良さを普及するため、漆にまつわる人々が一堂に会するイベント「漆サミット」

漆産業と漆文化の更なる継承と発展を図る目的で、２０１０年からほぼ毎年行われている「漆サミット」。ここでは、漆に関わるさまざまな分野の人々が集まり、漆文化の継承とさらなる発展を目指してお互いの情報交換や相互理解を図っています。

では46人まで激減。そこで二戸市では、漆掻き職人の担い手を確保するために、地域おこし協力隊制度を活用した漆掻き職人「うるしびと」の養成を行っています。ここでは、日本うるし掻き技術保存の会協力の下、漆掻きの技術習得のみならず、塗師・木地師の育成や漆器製作技術の習得、漆掻きに必要な道具の製作者養成など、漆産業や地域振興へ関わる多くの活動に着手。現在では浄法寺町の漆掻き職人は20名を超え、全国で一番多くの漆掻き職人を抱えています。今後も継続して漆掻き職人を育成するため、６～10月以外での就労確保や、幅広い年代の人々が活躍できる制度の創設などを目指しています。